

# 古代の水滴に関する一試論

丸杉 俊一郎

**要旨** 硯で墨を磨るためには、水を蓄え少量の滴を落とす水滴が不可欠である。しかし、文書作成行為において水滴は重要な役割をもつにもかかわらず、形態など考古資料から触れる機会はすくなかったといえる。本稿では、その機能が論じられることが多い須恵器・平瓶の諸属性を分析し、水滴の史的意義について検討した。その結果、頸部が短く体部に稜線を有し頂部に把手を付す小型の平瓶は、古代東海道西部では遠江国西部の官衙遺跡から主に出土している。また、この小型の平瓶が出土した遺跡では獸脚硯・無脚硯などの特殊硯や硯面の低い定形硯を保有しており、圈足円面硯を主体に陶硯が構成される遺跡では小型の平瓶は出土しないことを指摘した。これらの様相から、8世紀の官衙における本格的な文書作成に伴い小型の平瓶は水滴としての機能を確立させ、文書行政における権威を象徴する行為の主要な器種であったと評価した。

**キーワード**：平瓶、陶硯、特殊硯、官衙、文書作成、文房具

## 1 はじめに

古代の主要な文房具は、紙・筆・墨・硯で構成されている。この他にも、木簡・刀子・砥石・文鎮・印・机なども含めてよいであろう。そのなかでも考古資料として出土量が多いのは陶硯であり、これまで多くの論考により様々な角度から膨大な成果が得られ、研究が蓄積されてきた。

硯は当然のことながら、第一義的に墨を磨るための道具である。その際、必要不可欠なのは硯に注ぐ水であり、その水を蓄えておくために用途が特化された容器が水滴である。水滴は『和名類聚抄』に「水滴器 御覽寺目録云 水滴器 今案和名須美数理賀米」とあって、「すみすりかめ」と呼ばれていた。このように文書作成行為において水滴は重要な役割をもつにもかかわらず、その形態など水滴の具体像について考古資料から触れる機会はすくなかったといえる。

本稿では陶硯と密接な関連を有する水滴を、その機能が論じられることが多い平瓶の諸属性から検証し、古代社会における文字関連資料、特に文房具類の史的意義について迫りたい。

なお、本稿では須恵器の平瓶を対象とし、古代東海道諸国の伊賀・伊勢・志摩・尾張・三河・遠江・駿河・伊豆（以下、古代東海道西部）を対象範囲として論を進めていく。

## 2 古代東海道西部の小型平瓶

水滴は硯で墨を磨るために水を蓄え、少量の滴を落

とすために使用される容器と捉えられ、その用途から必然的に小型であることが要求されよう。ここでは小型の平瓶の諸属性について触れておきたい。

**平瓶の規模** まずは平瓶の法量を検討するために、図1に7世紀中葉～9世紀中葉頃の古代東海道西部における窯業遺跡での平瓶を、体部最大径を法量の基準として計測・図示した。

その結果、体部最大径25 cm以上の平瓶が最も多く、12～14 cm台に小ピークがあることが読み取れる。したがって、前者を大型品・後者を中型品として位置付けることが可能であり、12 cm未満は小型品として認められるであろう。

**小型平瓶の分類** 図2に古代東海道西部における消費遺跡出土の小型の平瓶を図示した。管見により出土遺跡は実際には増加すると思われるが、現状では以下のとおり分類できる。

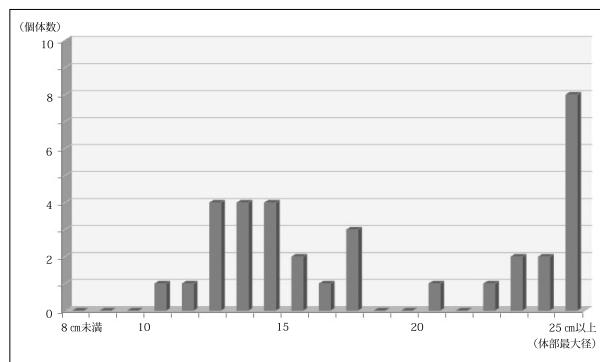
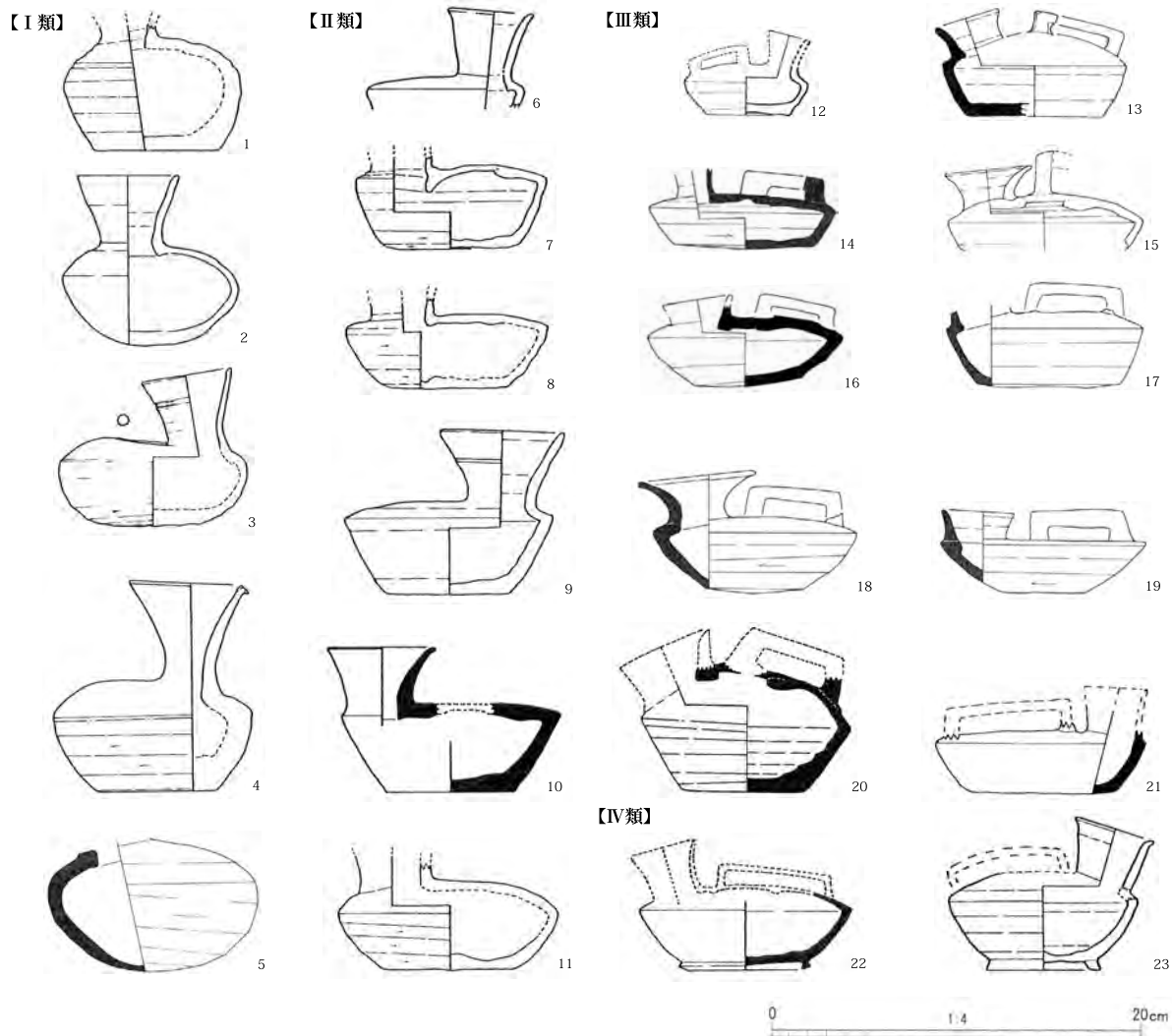


図1 窯跡出土平瓶の法量



1: 三重・覺正垣内 2: 愛知・大渕 3: 三重・居敷 4: 三重・六大A 5: 14・17~19: 静岡・吉美中村 6: 愛知・八王子 7: 三重・川島遺跡群 8: 三重・立花堂 9: 三重・焼野 10・20・22: 三重・斎宮跡 11: 三重・城之越 12: 静岡・城山 13: 静岡・井通 15: 静岡・天の川 16: 静岡・宮竹野際 21: 三重・杉垣内 23: 愛知・寄名山

図2 小型平瓶の諸例

**I類** 球形の体部に長い頸部をもつ。底部は丸底と平底がある。

**II類** 体部に稜線を有し、長い頸部をもつ。底部は平底である。

**III類** 体部に稜線を有し、頂部に把手を付す。頸部は短く、底部は平底である。

**IV類** 体部はIII類と同形態だが、頸部はやや長頸化する。底部に高台を付す。

これらは中・大型品の平瓶と同様、I類からIV類へと変遷するとみてよいであろう。その年代もこれまでの須恵器研究から、I類は7世紀後半頃・II類は7世紀後葉～8世紀前葉頃・III類は7世紀末葉～8世紀後葉頃・IV類は8世紀後葉～9世紀前半頃と概ね捉えられる。

**陶硯との関連** ここでは7・8世紀代を主体とした

陶硯との関連をみていこう。

I類の小型平瓶が出土し陶硯を保有する遺跡には、愛知・大渕遺跡と三重・六大A遺跡がある。大渕遺跡では外堤径26cm以上の大型の圈足円面硯が1点、六大A遺跡では計6点の円面硯が出土している。六大A遺跡では細部の爪まで表現された獣脚部付圈脚円面硯が出土しており、帰属時期は7世紀代を中心に8世紀前葉までの時間幅と捉えられている。

II類では三重・斎宮跡のみに陶硯が確認されている。

III類では静岡・城山遺跡、宮竹野際遺跡、井通遺跡と大型品を含めた圈足円面硯が多数出土している遺跡から出土が確認されている。宮竹野際遺跡では蹄脚硯や無脚硯、井通遺跡では蹄脚硯・獣脚硯・提瓶硯・形象硯などの陶硯が確認されている。斎宮跡でも蹄脚硯・圈足円面硯・形象硯を含む多様な陶硯が出土している。

静岡・吉美中村遺跡は窯業関連遺跡と評価されているが、多くの種類の陶硯とともにⅢ類の小型平瓶が出土していることは看過できない事象である。

Ⅳ類では愛知・寄名山遺跡より圈足円面硯が1点出土している（註1）。

### 3 小型平瓶の歴史的評価

**小型平瓶の機能** 小型平瓶は、奈良県・坂田寺において8世紀後半頃の金堂または講堂建立に際し、須弥壇鎮壇具としてⅢ類の小型平瓶が使用されたことが確認されており、水滴に機能が限定されたものではないことは明らかである。

古代東海道西部では、小型平瓶Ⅰ・Ⅱ類を伴う陶硯出土遺跡は極めて少ないことから、Ⅰ・Ⅱ類は水滴としての機能が希薄であると考えられる。特に丸底で長い頸部のⅠ類は、その形態的特質から用途を水滴と断定することに躊躇せざるを得ない。

一方、小型平瓶Ⅲ類が出土した遺跡では必ず陶硯を保有しており、遺跡の性格でも斎宮跡や遠江国では出土が官衙遺跡に限定されている。また、それらの遺跡

では多様な形態の陶硯が確認されており、これらを勘案すれば小型平瓶Ⅲ類が文書作成機能を有する施設における文字関連資料としての水滴であった可能性が高いと判断できる。

ただし、陶硯出土遺跡・点数に対する小型平瓶Ⅲ類の出土点数は大きな隔たりがある。その背景には、Ⅲ類を水滴として使用する地域は限られ、さらに水を注ぐ対象となる陶硯の種類も限定されていた可能性を指摘できる。

**特殊硯と水滴** 小型平瓶Ⅲ類は古代東海道西部のなかでも遠江国、特に天竜川以西の遠江国西部に分布が集中している。

また、遠江・駿河・伊豆国の陶硯を集成・検討した結果、圈足円面硯は3国全域で出土しているが、無脚硯・獣脚硯・提瓶硯・形象硯など特殊な陶硯は遠江国、特に天竜川以西の遠江国西部に分布の中心があることが判明している（丸杉2008）。

この2つの状況は対応関係にあると推察され、さらに小型平瓶Ⅲ類が出土する遺跡では図3に示したように特殊硯を保有していることが確認できた。

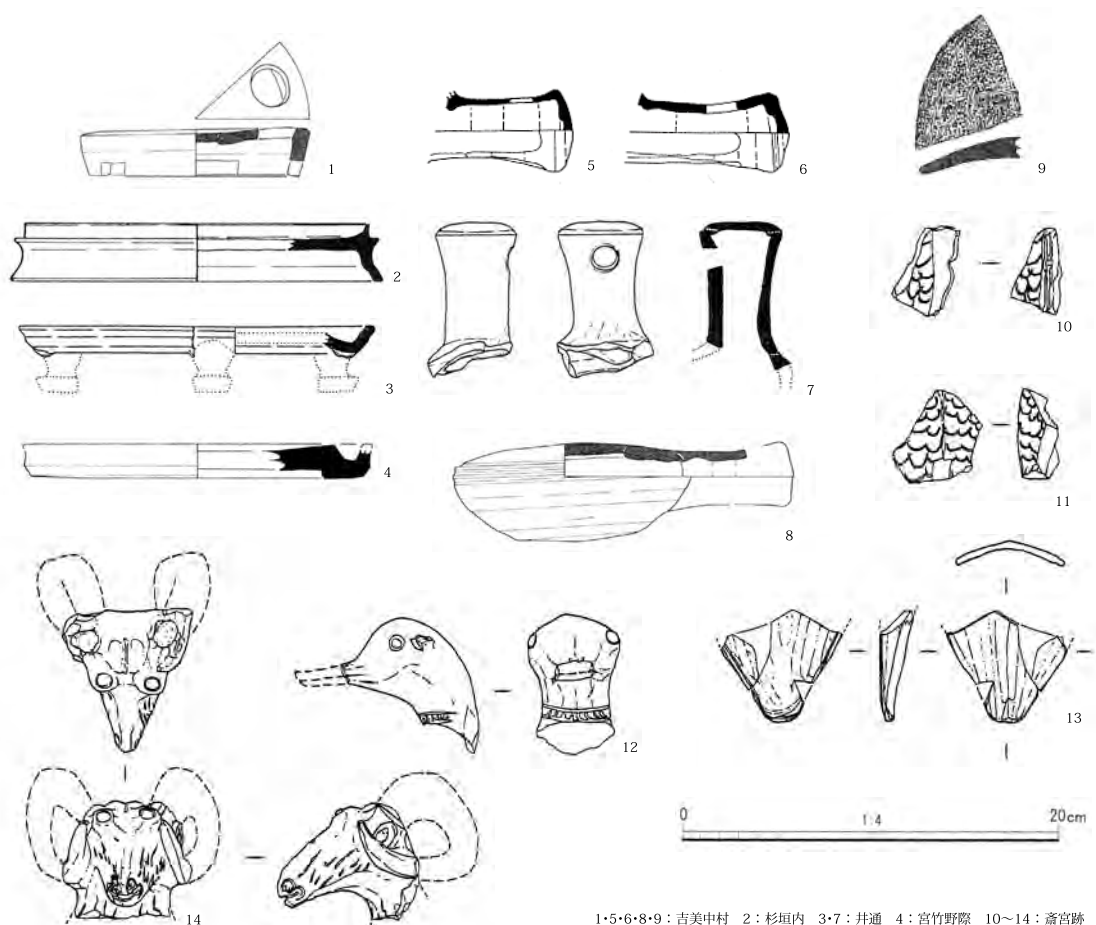


図3 小型平瓶出土遺跡の特殊硯

つまり、小型平瓶Ⅲ類は特殊硯に使用された水滴である蓋然性が高い可能性を指摘でき、圈足円面硯にはⅢ類を水滴として使用する機会は少ないものと考えることができる。

**硯面の規模と水滴** こうした特殊硯は硯面が小さい、または低いものが多いが、そのような特徴は特殊硯に限らず圈足円面硯においても認められる。

遠江・駿河・伊豆国における蹄脚硯・圈足円面硯の外堤径・器高分布を示したのが図4である。これを見ると外堤径は12 cm前後の小型品と16 cm前後の中型品に分類でき、器高は概ね7 cm前後に集中している。

しかし、外堤径を基準とした小型品・中型品では器高の分布幅が大きいことを読み解くことができる。このことを、器高は口径に比して低いものから高いものへと変遷するとの指摘もあるが（檜崎 1982）、本稿では陶硯の変遷・年代観を検証できる資料を持ち合わせてはいない。

ここで注目されるのは、小型品・中型品の最も器高の低い一群を有する城山遺跡出土の陶硯類である。城山遺跡では圈足円面硯はみられるものの、特殊硯は確

認されていない（註2）。城山遺跡での圈足円面硯は、外堤径が11 cmの小型品・15 cm台の中型品はともに器高が5 cm以下である。器高が5 cm以下の陶硯は、吉美中村遺跡でも確認されており、いずれも小型平瓶Ⅲ類が出土している。

一方、蹄脚硯や器高の高い圈足円面硯・外堤径が大きい大型の円面硯が出土する遺跡において、必ずⅢ類の小型平瓶が伴うものではない。

このように特殊硯に限らず器高の低い圈足円面硯が出土する遺跡からも小型平瓶Ⅲ類が確認されることは、水滴の対象陶硯は硯面が低い定形硯であることを示していると捉えることが出来よう。

**水滴出土の要因** 以上の検証で明らかにした考古学的様相から、小型平瓶Ⅲ類が水滴として機能した意義について推察しておきたい。

小型平瓶はⅢ類段階になり形態・出土遺跡・陶硯保有状況から、水滴としての機能を備えたと捉えられる。その要因には、8世紀の官衙における本格的な文書作成に伴い機能が確立したとみてよい。水滴の存在は必然的に硯と墨の存在を示すことになり、文書行政の実務における主要道具が具備されていたこととなる。

しかし、全ての陶硯類に小型平瓶Ⅲ類が水滴として使用された状況ではなく、特殊硯など硯面の低い定形硯を用途の対象としている。その背景は、硯で墨を磨り執筆する行為自体を個人に帰属させることが、文書作成機関における権威を象徴していたからであろう。つまり、机上の紙・筆・墨・硯を使用して文字を記すという一連の行為を個人が集約し執り行うことは、多数の人員により多量の文書を作成・管理を司る行政機関にすれば、その存在意義を示す最も象徴的な行為である。そのため、硯は個人の所作に伴うものであることから、特殊硯など硯面の小さく低い硯の方が十分な効力を発揮したものと考えられる。その際、紙・筆・墨は厳格に管理されていたことが指摘されており（綾村 1988）、圈足円面硯の普及率を比較すれば希少性のある特殊硯を優先して採用したものと想定できる。したがって、水滴はその舞台装置としての文房具類の一つとして評価できるであろう。

このような行為と道具の個人所有が同一化したものが傾斜硯、風字硯や長方硯の出現と捉えられるであろう。古代東海道西部では灰釉陶器の小型平瓶が、風字硯などの陶硯類に水滴のひとつとして使用されたことであろう。

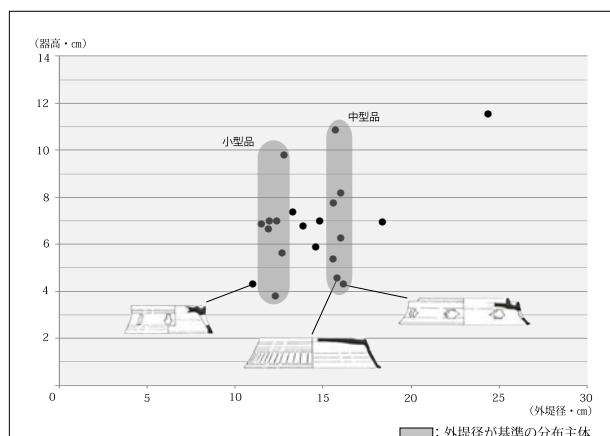


図4 円面硯の規模

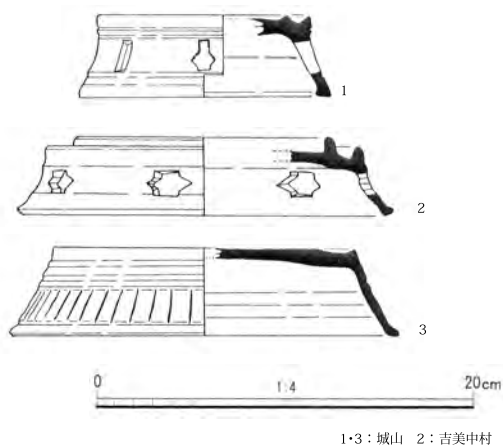


図5 器高の低い円面硯

## 4 結 語

小型平瓶の検討を通じ、水滴としての機能・歴史的  
特質を整理した。

遠江・駿河・伊豆国での小型平瓶Ⅲ類は、陶硯類の  
様相を勘案すると多様な陶硯類を保有する遠江国西部  
の官衙遺跡でのみ確認でき、圈足円面硯を主体に陶硯  
が構成される駿河・伊豆国の各遺跡では小型平瓶は出  
土しないことを読み取ることができる。したがって、  
Ⅲ類は圈足円面硯ではなく、特殊硯や硯面の低い定形  
硯に使用された水滴であると指摘した。また、水滴は  
8世紀の官衙における本格的な文書作成に伴い機能が  
確立し、文書行政における権威を象徴する行為の要素  
として不可欠な存在であったと評価した。

一方、小型平瓶Ⅲ類を水滴として使用したと考えら  
れるのは遠江国西部で顕著に確認できるが、その地域  
以外の遠江国や他の古代東海道西部では陶硯類にどの  
ような水滴が主に使用されたかは判然としない。都城  
では平瓶形以外にも横瓶形・長頸瓶形などの小型品が  
水滴としての用途が含まれる可能性を示唆している。  
また、水滴は正倉院文書をみるかぎり硯のような主要  
な調度ではなく通常は筆洗にあたる「筆漬杯」等から  
硯水を得ていたとの指摘もある（北野 2005）。さらに、  
法隆寺献納宝物には表面に鳳凰・宝相華唐草などを精  
細に彫り込んだ金銅製小壺型水滴があり、『栄華物語』・  
『枕草子』などの文献資料からは金属製・ガラス製・  
青磁の水滴が記載されている（原田 2001）。絵画資料  
でも『源氏物語絵巻 夕霧』に小壺型注口付の水滴が  
描かれている（小松 2001）。

水滴は多くの素材により成立していることが判明す  
るが、その様相の具体像にこれ以上迫ることは難しい。  
今後も多様な古代社会を示す陶硯類をはじめとする考  
古資料を精緻に分析し、新たな情報を加えて検討を積  
み重ねる作業が求められるであろう。

## 註

- 1 IV類は口縁端部の特徴などから灰優陶器との関連が推定  
される。また、今回は対象から除外したが、灰釉陶器の  
平瓶は須恵器よりも法量が拡大する傾向がみられる。こ  
れらを勘案すると、IV類及び灰釉陶器の平瓶は風字硯と  
の関連を考慮する必要があるだろう。
- 2 伊場遺跡群内では物資集散施設と捉えられている鳥居松  
遺跡で提瓶硯が確認されている。

## 参考文献

- 愛知県史編纂委員会 2010 『愛知県史 資料編 4 考古 4  
飛鳥～平安』愛知県
- 綾村 宏 1988 「筆・墨・硯が表す社会」『日本の古代 14  
ことばと文字』中央公論社
- 生田和宏 2003 「城柵官衙遺跡における陶硯の様相」『古代  
の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 小田和利 2003 「地方官衙と陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸  
問題』奈良文化財研究所
- 尾野善裕 2000 「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『須恵  
器生産の出現から消滅』東海土器研究会
- 小幡早苗 2005 「三河における古代陶硯の展開」『考古遺物  
から見た古代三河』三河考古学談話会
- 角正芳浩 1999 「斎宮跡の硯」『斎宮歴史博物館 研究紀要  
八』斎宮歴史博物館
- 笠井賢治 2004 「伊賀地域の円面硯に関する覚書」『かにか  
くに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会
- 神野 恵・川越俊一 2003 「平城京出土の陶硯」『古代の陶  
硯をめぐる諸問題』奈良文化  
財研究所
- 北野博司 2005 「文房具」『文字と古代日本 2』吉川弘文館
- 古代の土器研究会 1997 『7世紀の土器（近畿東部・東海  
編）』
- 小松大秀 2001 『日本の美術 第424号 文房具』至文堂
- 齊藤孝正 1990 「尾張における飛鳥時代須恵器生産の一樣  
相」『名古屋大学文学部研究論集 107』
- 齊藤孝正・後藤建一 1995 『須恵器集成図録 第3巻 東  
日本編 I』雄山閣出版
- 鈴木敏則 1998 「第5章 古墳時代後期～律令時代の土器」  
『梶子北遺跡 遺物編（本文）』浜松市文化  
協会
- 鈴木敏則 2000 「古墳時代湖西窯編年の再構築に向けて」  
『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研  
究会
- 田中広明 2004 「七世紀の陶硯と東国の地方官衙」『歴史  
評論 第655号』歴史科学協議会
- 東海土器研究会 2000 『須恵器生産の出現から消滅』
- 檜崎彰一 1982 「日本古代の陶硯」『考古学論考』平凡社
- 奈良文化財研究所 2003 『古代の陶硯をめぐる諸問題』
- 西口壽生 2003 「畿内における陶硯の出現と普及」『古代の  
陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 原田一敏 2001 「水滴の歴史」『日本の美術 第424号 文  
房具』至文堂
- 松田留美 1997 「長岡京出土の陶硯」『都城 8』向日市埋蔵  
文化財センター
- 丸杉俊一郎 2008 「地方官衙における徴税形態の様相」  
『静岡県考古学研究 40』静岡県考古学会

宮瀧交二 2001 「日本古代の「筆記具」と権力」『歴史評論 1月号』校倉書房

## 遺跡文献

愛知県教育委員会 1980 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅰ）』

愛知県教育委員会 1981 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（Ⅱ）』

愛知県教育委員会 1983 『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』

愛知県埋蔵文化財センター 1990 『志貴野遺跡 小島遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1991 『大淵遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1994 『黒笹 40・89 号古窯跡黒笹 G2 号古窯跡 立楠古窯跡』

愛知県埋蔵文化財センター 1999 『細口下 1 号窯 鴻ノ巣古窯 高針原 1 号窯』

愛知県埋蔵文化財センター 2001 『八王子遺跡』

可美村教育委員会 1981 『城山遺跡調査報告書』

吉良町教育委員会 2008 『寄名山遺跡発掘調査報告書』

湖西市教育委員会 1990 『古美中村遺跡発掘調査報告書』

湖西市教育委員会 1992 『湖西一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』

小牧市教育委員会 1976 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告』

小牧市教育委員会 1979 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』

小牧市教育委員会 1982 『桃花台ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ』

小牧市教育委員会 1994 『篠岡 112 号窯発掘調査報告書』

斎宮歴史博物館 1988 『斎宮跡発掘資料選』

斎宮歴史博物館 1992 『史跡 斎宮跡』

斎宮歴史博物館 1995 『史跡 斎宮跡』

静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007 『井通遺跡』

豊橋市教育委員会 2002 『二川古窯址群（Ⅱ）』

名古屋市教育委員会 1976 『徳重西部地区土地区画整理事業予定地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』

名古屋市教育委員会 1983 『NN-268 号窯跡発掘調査報告書』

名古屋市教育委員会 1989 『NN-259 号窯跡発掘調査報告書』

名古屋市教育委員会 1994 『鳴海地区 須恵器窯跡調査報告書』

奈良文化財研究所 2006 『平城京出土陶硯集成Ⅰ』

奈良文化財研究所 2007 『平城京出土陶硯集成Ⅱ』

日進町教育委員会 1978 『折戸 80 号窯発掘調査報告書』

日進町教育委員会 1984 『株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』

浜松市文化振興財団 2012 『宮竹野際遺跡 6 次』

牧之原市教育委員会 2008 『天の川遺跡』

三重県教育委員会 1974 『斎王宮跡発掘調査報告Ⅰ』

三重県教育委員会 1989 『昭和 61 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』

三重県教育委員会ほか 1991 『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告 第 3 分冊 4』

三重県埋蔵文化財センター 1992 『城之越遺跡』

三重県埋蔵文化財センター 1996 『居敷遺跡発掘調査報告』

三重県埋蔵文化財センター 2002 『川島遺跡群（第 1 次）発掘調査報告』

三重県埋蔵文化財センター 2002 『六大 A 遺跡発掘調査報告』

三重県埋蔵文化財センター 2003 『覚正垣内遺跡発掘調査報告』

三重県埋蔵文化財センター 2008 『立花堂遺跡発掘調査報告』

三好町教育委員会 1988 『愛知大学用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』

三好町教育委員会 1992 『黒笹第 11 号窯発掘調査報告書』

三好町教育委員会 1995 『黒笹 44 号窯・北畑遺跡発掘調査報告書』

四日市市教育委員会 2013 『久留倍遺跡 5』

## 図出典

図 1 筆者作成、下記窯跡資料を各報告書より計測・編集（湖西窯）東笠子 44 地点

（猿投窯）

高針原 1 号窯・I-17 号窯・I-41 号窯・K-44 号窯・O-80 号窯・K-1 号窯・NN-265 号窯・NN-266 号窯・K-11 号窯・I-101 号窯

（尾北窯）

S-78 号窯・C-2 号窯・S-81 号窯・高蔵寺 2 号窯・S-112 号窯・S-2 号窯

（その他）上尾戸窯

図 2・3・5 報告書から引用・編集

図 4

筆者作成、丸杉 2008 を参考に各報告書より計測・編集